



APOCALYPSE DU BALLET.

J.J.グランヴィル、T.ドゥロール著『もうひとつの世界』1844年刊（後期は別ページを展示）

Topics

シャガール展

都市のフランス 自然のイギリス ～18・19世紀絵画と挿絵本の世界～

寄贈作品による 近代日本画展 -楠原コレクション・島コレクションを中心に-

若冲とその時代

シャガール展

シャガールが描く「結婚式」

マルク・シャガールの名を聞くと、多くの方々が、空を飛ぶ恋人たちをイメージするかもしれません。今回の展覧会にも、恋人たちや新婚カップルを描いた絵画が多数出品されています。(図1) 熱烈な愛妻家として知られるシャガールは、ベラ・ローゼンフェルトと結婚した1915年頃から、幸せそうなカップルを度々絵に登場させてきました。なかでもウェディングドレスと礼服を纏う新郎新婦は、自らの結婚の思い出に由来することもあって、晩年にいたるまで画家が特に好んだモチーフでした。

けれどもマルクとベラの実際の結婚は、必ずしも祝福に満たされたものではありませんでした。ユダヤ人資産家の娘だった新妻ベラに対し、新郎マルクは貧しい画家にすぎず、明らかに不釣り合いな2人の結婚式は、ローゼンフェルト家の反対を押し切ったかたちで強行されました。「ぼくはろうじて我慢をしてもらっているのを感じていたから、結婚式は厳しい試練だったよ。そのとき以来、ぼくは何度もその結婚式を絵に描いてきたけれども、いつも詩情の溢れるロマンティックなものに変えてしまってきた。ぼくの気持ちから言えば、それは厳密な事実とは言いがたいのだけれどもね」と、画家自身のちに回想しています。周囲から望まれない結婚だったからこそ、せめて自らの絵の中では幸せなイメージとして表現したかったのでしょう。

作品に見られる画家の怒りと悲しみ

恋人たちや結婚式を描いた作品がまさにそうですが、シャガールの絵画は、愛と夢にあふれたロマンティックなものと思われがちです。けれども彼が97年におよぶ生涯のなかで描いた作品は、決して明るく楽しいものばかりではありません。そもそも、ユダヤ人として生まれ、2つの世界大戦やロシア革命に翻弄されたシャガールの生涯は、まさに悲しみと苦難の連続でした。絵のなかにそれら苦難の跡が垣間見えることも珍しくなく、今回の展覧会にも画家の強い感情が表に現れた作品がいくつか展示されています。

例えば《世界の外へどこへでも》(図2)は、画家自身の抑えきれない怒りを表したと言われる作品です。ロシア革命勃発後の1918年、シャガールは、パリ滞在時に面識のあった革命政府文化相アナトリー・ルナチャルスキーの信を得て、生まれ故郷ヴィテブスクに美術学校を設立します。けれども当時のロシアでは、絶対主義(シュプレマティスム)や構成主義など抽象芸術の勢いが強く、シャガールの具象的で物語的な作風は時代遅れとみなされました。まもなく、自ら教授として招聘した絶対主義の提唱者カジミール・マレーヴィチとシャガールとの間に、主導権争いが始まりました。二人の対立は学生たちをも巻き込んで次第に激化していき、結局シャガールは校長の職を辞してヴィテブスクを去ります。《世界の外へどこへでも》は、このマレーヴィチとの確執の只中で描かれました。理論偏重の絶対主義を

M
A
R
C
H
A
G
A
L
L



《軽業師》1943年 個人蔵



(図1)《枝》1956-62年 三重県立美術館蔵



(図2)《世界の外へどこへでも》1915-19年 群馬県立近代美術館蔵

皮肉のように頭だけが宙に浮かんだ男は、確かにマレーヴィチその人に良く似ています。またこの絵の表面には、靴で踏みつけられたような痕も残っており、マレーヴィチに対するシャガールの憎悪の深さを今に伝えています。

もう1点、画家の感情がストレートに表出した作品を紹介しましょう。前述したように、シャガールの「恋人たち」といえば明るくロマンティックな作品がほとんどですが、今回出品される《青い恋人たち》(図3)は、色彩も沈み、どこか悲しく儂^{はかな}げに見えます。シャガールが得意とする鮮やかな青とは異なるこの暗い青は、どこかピカソの青の時代を彷彿させますが、実際画家自身の深い悲しみを反映しているのです。

フランスがナチスドイツに敗れると、ユダヤ人であったシャガール一家は、アメリカへの亡命を余儀なくされます。亡命生活は7年におよびましたが、この間、最愛の妻の死という大きな悲劇がシャガールをおそいました。画家の悲しみは大変深く、アトリエにある絵を全て裏返すと、約9ヶ月のあいだ絵筆を取らなかったといわれています。

《青い恋人たち》は、妻ベラへの哀悼を表した作品とされています。腕を伸ばして、画面左に去りゆく女を引きとめる男の姿には、妻の死に直面したシャガール自身の心情が反映されているのでしょうか。画面右上にある下半分が隠れた三日月も、妻の死を暗示しています。

黒いシャガールの魅力—《わが生涯》と《聖書》

大変残念なことですが、シャガールの版画には、どこか粗製濫造のイメージが付きまといまいます。実際彼の最晩年には、エディション数1000を超える粗悪な版画が市場に出回ったこともありました。しかしながら、版画に関する不名誉はあくまで晩年に限った話で、戦前から1960年代までにつくられた版画のなかには、創造性に富む名品が数多く存在します。特に両大戦間期には、版画が制作活動の中核を占め、画家自ら銅板に向かい、版画の技法を熱心に研究しました。シャガールというと、鮮やかな色彩のカラーリトグラフを思い浮かべる方も多いと思いますが、彼が戦前に制作したのは、エッチングやドライポイントなど黒一色の版画です。意外に思うかもしれませんが、カラーリトグラフを本格的に始めるのは戦後のことなのです。

今回の展覧会には、シャガールの版画の中でも最高傑作とされる2つの版画集が出品されます。当初シャガールの自伝の挿絵として制作された《わが生涯》は、自伝のロシア語があまりに特殊すぎて翻訳困難だったため、結局挿絵だけが20点組ポートフォリオとして出版されたという曰くつきの作品です。《わが生涯》では、画面全体を



(図3)《青い恋人たち》1948-53年 宇都宮美術館蔵



(図4)『聖書』より《アブラハムの犠牲》1956年刊行 宇都宮美術館蔵

細かいモチーフで埋め尽くす画家独特の作風が影をひそめ、余白を生かしたシンプルな構図が目につきます。最初期の版画であるがゆえに技術的な未熟さも目立ちますが、それがかえってプリミティブな味わいを醸し出し、油彩画とは異なる魅力を引き出しています。

セザンヌやピカソの画商として知られるアンブロワーズ・ヴォラールの依頼で制作された版画集《聖書》(図4)も、今回その一部が展示されます。《聖書》は、1939年の段階ですでに完成目前だったにもかかわらず、ヴォラールの死と第2次世界大戦の勃発により制作の中断を余儀なくされ、1956年になってようやく世に送り出されました。この作品のために、シャガールは、エッチングの版の上にニスを塗ったり、紙やすりで削ったりする独自の技法を開発し、独特の明暗表現を生み出しました。

シャガールという色彩画家という印象が先行しますが、黒一色の版画には、油彩画やカラーリトグラフには見られない独特の味わいがあります。シャガールの版画と聞くと何となく敬遠気味の方も、この機会にぜひ、これら黒い版画の魅力をお楽しみください。

[学芸員 水沼啓和]

©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2007

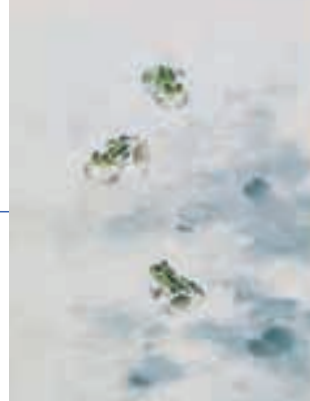
シャガール展

2007年6月16日(土)▷7月29日(日)
 10:00 - 18:00 (金曜日・土曜日は20:00まで)
 * 入場受付は閉館の30分前まで
 [休館日] 7月2日(月)
 [観覧料] 一般 1,000(800)円
 高校・大学生 700(560)円
 小・中学生 無料
 *()内は前売および団体30名以上の料金

寄贈作品による

近代日本画展

— 楠原コレクション・島コレクションを中心に —



(図3) 田中以知庵《かえる》(部分)
楠原コレクション

千葉市美術館はこれまで多くの皆様のご協力に支えられてきましたが、とりわけ、貴重な美術作品をご寄贈いただくという、有り難いご支援も頂戴してまいりました。昨年度はさらに、千葉市内在住の楠原豊松氏より室町時代から現代までの日本画を中心とするコレクションを受贈しました。そこで「シャガール展」で多くのお客様をお迎えする機会に同時開催する所蔵作品展の中で、このことをいち早くご紹介することといたしました。楠原氏は、市内のご出身でお仕事の傍ら約30年前から一点また一点と作品をお求めになられてきたそうです。今回は近代日本画展ということで、楠原コレクションからの12点に加え、個人の方がご自分の楽しみで集められご家庭で鑑賞されていたという性格を通わせる島コレクション(平成11年度に島直枝氏より受贈)、鈴木コレクション(平成14年度に鈴木民三氏より受贈)からの作品を合わせて、約40点を展示いたします。いずれ劣らぬ日本画の巨匠たちによる小品ながらも味わい深い逸品ですが、楠原コレクションを核として努めて同じ画家の作品、共通の師の作、同時代の傾向を示す作などを選び、構成してみました。本稿でもこの新しい所蔵品を中心に簡単にご紹介しましょう。



(図1) 中村岳陵《橋》楠原コレクション

中村岳陵(1890-1969)の《橋》(図1)は、古典に題材を得、古画の風俗を描く作品が多く見られた大正半ば頃の初期作でしょうか。中央に橋を渡し、太くゆったりとした線描による水面の表現など、小林古径の作品《雨》(大正6年)も思い起こされます。岳陵の作品と言えば、昨年の「ボランティアが選ぶ千葉市美術館コレクション展」に選ばれた、木の幹にとまる蝉一匹を描く、この季節にまさにふさわしい《青韻》。島コレクションの印象深いこの一点のほか、鈴木コレクションからは、岳陵が東京美術学校に入学して就いた寺崎広業(1866-1919)の屏風を出品します。同じく広業に導かれた野田九圓(1879-1971)の《放

牧》、岳陵に師事し現代日本画壇の重鎮であった千葉県ゆかりの関主税(1919-2000)の清澄な風景画《池心》(図2)も新たな所蔵品です。

京都画壇からは、多くの逸材を輩出した大御所竹内栖鳳(1864-1942)の洒落た小品、木島桜谷(1877-1938)の風景画も加わりました。池田遙邨(1895-1988)の初期作と思われる《松島図(仮題)》

は、同じ頃に出会いその生涯に忘れ得ぬ示唆を与えた小野竹喬(1889-1979)の作品とともに展示します。

展示室の一角には、田中以知庵(1893-1958)《かえる》(図3)を契機として、南画的傾向を示した作品をまとめてみました。無事かえる、若かえる、福かえると語呂のよさでも人気のあったのでしょう、「蛙の以知庵さん」とも云われ、独特の飄逸な絵画世界を築いた田中以知庵の作品は、島コレクションにも《芭蕉翁図》があり、ちょうどかの名句「古池や蛙飛び込む水の音」をしたためようというところか、視線の先に小さな蛙が見えます。

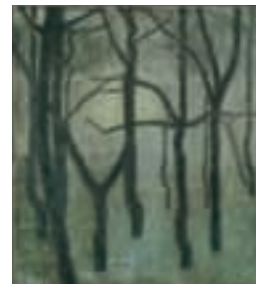
このほかにも、共に荒木寛畝の門下で花鳥画の名流の伝統を発揮した池上秀畝(1874-1944)と荒木十畝(1872-1944)の作品《雪》を並べられることになりましたし、川合玉堂(1873-1957)とその門下の児玉希望(1898-1971)の《高原清秋》とともに、山本丘人(1900-1986)や吉田善彦(1908-2001)(図4)の作品も加わり、風景画の名手たちのエッセンスも味わえます。

美術館で求めがちな人を圧倒するような大作、展覧会出品作のようなものは含まれませんが、四季折々に楽しめる季節感にあふれた優品が揃います。絵と共にある豊かな暮らしを思いつつ、ごゆっくりご鑑賞いただければ幸いです。

[学芸員 松尾知子]



(図2) 関主税《池心》楠原コレクション



(図4) 吉田善彦《月の林》楠原コレクション

寄贈作品による 近代日本画展

— 楠原コレクション・島コレクションを中心に —

2007年6月16日(土)▷7月29日(日)

10:00 - 18:00 (金曜日・土曜日は20:00まで)

* 入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 7月2日(月)

[観覧料] 一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30名以上の料金

* 同時開催「シャガール展」のチケットをお持ちの方は無料

若冲とその時代

Jakuchu♥ and His Age

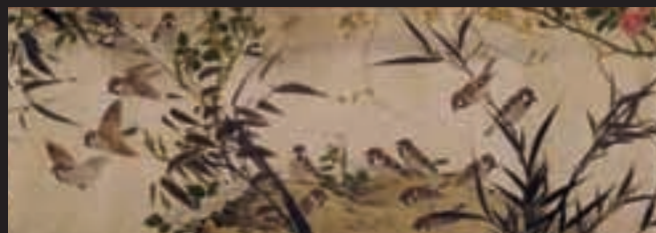
♥若冲ブーム

伊藤若冲(1716-1800)が最近大人気です。もともと無名だったわけではありません。同時代に出版された人名録『平安人物誌』の画家の項目にも早い順番で名前があがります(順序には意味がないという意見もありますが、若干格付け的な要素はありそうです)。最近相国寺承天閣美術館で「動植綵絵」30幅の“里帰り”展が人気を集めました(もともと若冲が寄進したものを、寺勢衰退の財政難に悩む相国寺が皇室に献納したので“里帰り”なのです)。「動植綵絵」は明治22(1889)年に御物になる以前から注目を集めていました。若冲がどのように取り上げられていたか、ご興味をお持ちの方は中村麗子さんの論文「明治期から昭和初期における伊藤若冲の受容について—文献分析を中心に—」(『美術史論叢』19 2003年)をご参照ください。早くも昭和2(1927)年には恩賜京都博物館で総合的な若冲の展覧会が開かれています。その後、当館前館長でもある辻惟雄先生が昭和43(1968)年『美術手帖』の連載「奇想の系譜—江戸のアヴァンギャルド」に取り上げ、「奇想」の画家として認識されるようになりました。昭和46(1971)年には東京国立博物館で若冲の特別展観が催されています(担当したのは若き日の現館長小林忠でした)。

そして平成12(2000)年、京都国立博物館で大規模な若冲展が開かれ、若冲ブームが起きています。CM・商品パッケージ・映像作品などにもたびたび若冲の作品が使われています。昨年から今年にかけては若冲を愛するアメリカ人コレクター、プライス氏のコレクション展が日本国内を巡回し、若冲人気はいっそう高まっています。

♥若冲は一日にしてならず

若冲ブーム以前、「奇想」の画家のうち、同時代に京都で活躍した伊藤若冲・曾我蕭白(1730-1801)・長沢芦雪(1754-1799)の三人では、少なくとも若冲と蕭白の人気はほぼ互角だったような印象があります。しかし、いまや若冲が大きくリードしているようです。若冲の絵画世界は花や鳥、虫、動物の姿を鮮やかに描き出し、知識がなくてもその美しさを味わいやすいのに対して、蕭白のほうは中国の故事にちなむ画題が多く理解には知識が必要です。それが若冲リードの理由なのでしょう。しかし個性的な若冲の絵画世界も突然単独で出現したわけではありません。江戸時代中期の京都には若冲・蕭白・芦雪、円山応挙(1733-1795)らが相次いで登場するような文化の蓄積がありました。また当時の文化の中国への憧憬を反映して、享保16(1731)年来日した中国人画家沈南蘋の精緻で華麗な描写が大流行したのですが、若冲もまた南蘋画風の流行と無縁ではありません。独特な作風の若冲ですが、孤立した存在ではなく、その時代・その場所があってこそ現れたのです。



長沢芦雪・曾道怡《花鳥蟲獸図巻》(部分) 千葉市美術館蔵

♥それでもやっぱり若冲が好き

江戸時代絵画全般を愛するものとして、若冲だけが人気を集めがちな現状にやや複雑な気持ちを抱いています。蕭白も芦雪も応挙も魅力的な画家ですし、華やかで装飾的な画風ということであれば、少し後の時代に江戸で活躍した酒井抱一(1761-1828)も負けず劣らず素晴らしい画家です。ですから若冲と同じ時代の京都の画家を紹介し、若冲登場につながる南蘋派の画家の作品を合わせて展示するこの展覧会を考えました……というのは本当です。でもやっぱり私も若冲が大好きで、若冲を展示したくてこの展覧会を準備しています。展覧会をご覧いただく方が「若冲いい！でも他の画家もいい！」とっていただけるとうれしく思います。

[学芸員 伊藤紫織]



伊藤若冲《旭日松鶴図》
摘水軒記念文化振興財団蔵



伊藤若冲《月夜白梅図》個人蔵

若冲とその時代

2007年8月7日(火)▷9月17日(月・祝)
10:00 - 18:00 (金曜日・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 9月3日(月)

[観覧料] 一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30名以上の料金

*同時開催「都市のフランス 自然のイギリス」展のチケットをお持ちの方は無料

都市の フランス 自然の イギリス

～18・19世紀絵画と挿絵本の世界～



リチャード・ウィルソン《アクア・アチエトサ》1754年頃

ヨーロッパの中でも対照的なイメージを持たれることの多い二つの国、フランスとイギリス。18・19世紀を通して、両国の首都パリとロンドンとは、ともに産業や政治の革命による社会の大きな変化を経て、ヨーロッパの中心都市へと成長してゆきます。

ターナーやコンスタブルの風景画をはじめとする絵画作品とあわせて、本展覧会でご紹介する挿絵本の世界には、詩や物語に添えられる挿画とはやや性格の異なる、諷刺画と呼ばれる分野があります。「諷刺」「諷刺画」とは、「遠まわしに社会・人物の欠陥や罪悪などを批判すること。それを目的として、機知的・冷評的に描かれた絵画」(『広辞苑』より)であり、政治諷刺、社会諷刺など、その矛先が向けられる対象は、時代や社会によっても様々といえます。今日でも、私たちが諷刺画を目にする機会は珍しくありません。新聞や雑誌では、政治家などのデフォルメされた身体的特徴や、身振り、口癖などをとらえた辛辣な描写とともに、「時事問題」が訴えられています。もっとも、最近の新聞の四コマ漫画は、社会諷刺としては穏やかとも言えるかもしれませんが。

19世紀の諷刺画家の目は、政治はもちろんのこと、社会の変化とともに登場してきた新しいタイプの人間や社会現象にも向けられます。権利を主張する「つよい女」たちの勇ましい姿や、1860年前後に流行したクリノリンで膨らませた大きなスカートの引き起こすコミカルな騒動などが、小さな画面に大胆に描かれています。

フランスでは、七月王政期(1830-48年)以降、ジャーナリズムの発展と複製技術の進歩にともない、大衆のための挿絵入りの新聞や雑誌、本の出版が飛躍的に増えます。革命を経て、市民が社会の主導権をにぎるようになると、描かれる対象も変わってきました。ファッション版画で人気を得て、文芸雑誌や諷刺雑誌に同時代の女性を描いたガヴァルニ。諷刺画には、しばしば「詞書(レジャンド)」と呼ばれるセリフが書き添えられますが、ガヴァルニは、登場人物たちの言葉も自ら書いたと言われています。娯婦たちの日常や、カーニバルでの人間模様、舞台裏から客席を覗く踊り子たちのヒソヒソ話などが、パリの都市生活を伝えています。

政治には関心を示さなかったガヴァルニとは対照的に、王政批判の罪で投獄され、寄稿していた諷刺雑誌も廃刊に追い込まれて

しまうことになるオノレ・ドーミエ。今回展示の『シャリヴァリ』紙(1848-49年分の日刊紙を合本)では、二月革命(1848年)の前後、つかのま復活した政治諷刺に、再び筆を振るう画家の仕事を見ることができます。

登場人物の頭部を動物に置き換えて、様々な人間の性格を描きわけたグランヴィルの作品は、細やかな観察力とユーモアなしには実現しえないものといえます。ガヴァルニやドーミエ、グランヴィルの他、多くの画家が挿絵を寄せた『フランス人の自画像』(1840-42年)では、この時代のパリの様々な人物像が類型化されており、都市の自己イメージとしても、たいへん興味深いものといえるでしょう。

画家たちの観察眼は、人間だけに向けられたわけではありません。展覧会のもう一つのキーワード「自然のイギリス」に目を転じれば、自国の風景の発見から、その追求と克明な描写、近代を象徴するアイテムの一つである鉄道や、鉄道が変えてゆく風景や生活から主題を得た絵画などにも、変わりゆく時代の中で、人々がどのように目の前の社会をとらえようとしていたのかを、探ることができると思えます。

今回の展覧会は、栃木県立美術館より、改修工事を機にまとまった作品をお借りすることで実現したものです。質量ともに優れた同美術館のコレクションの中から、味わい深い作品の数々をお楽しみください。

[学芸員 山根佳奈]



トマス・ローランドソン W.ケーム『シンタックス先生の旅行記、ピクチャレスクを求めて』1812年刊(後期は別ページを展示)



J.M.W.ターナー 《風景、タンバリンをもつ女》1840-50年頃



J.J.グランヴィル 『当世風変身譚』1869年刊



ケイト・グリーンナウェイ マイルズ・B・フォスター
作曲『子どもの一日』1881年刊



ギユスターヴ・ドレ ラ・フォンテーヌ 『寓話』
年記なし(初版1868年刊)

中学生のためのギャラリークルーズ、再び！

日頃子どもたちの鑑賞体験をサポートしているボランティア・スタッフの発案による、夏休み限定のプログラム。学校単位での団体来館が少ない夏休みだからこそ、子どもたちに対して積極的に働きかけたい、という皆の気持ちから始まりました。今年は、新たに、ファミリー向けのプログラムも計画中。作品を選び、親子でじっくり楽しむ機会を用意します。

◎中学生のためのギャラリークルーズ'07

「時間旅行～革命から鉄道と万博の時代へ」

8月12日(日)、26日(日) 10:30より／13:30より

中学生対象、各回先着30人程度(事前申込み不要、8階展示室入り口で受付)

◎「ふぁみ★くる～ず 絵の中の森へ」

8月13日(月)、25日(土) 10:30より／13:30より

小学校3～4年生の児童と保護者対象 各回10組 *要事前申込み、大人のみ要観覧料。

都市のフランス 自然のイギリス ～18・19世紀絵画と挿絵本の世界～

2007年8月7日(火)▷9月17日(月・祝)

10:00 - 18:00 (金曜日・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 8月27日(月)(展示替えのため休室)、9月3日(月)

[観覧料] 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30名以上または前売料金

*前売券は千葉市美術館ミュージアムショップ(7月29日まで)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(9月17日まで)にて販売

ボランティア日和 episode13

学校から美術館にきてくれる子供達と一緒に作品をみるようになって5年目になります。

一期一会の出会いですが、私達ボランティアの多くがとても楽しみにそして大切に思っています。千葉市は広く学校も多いので、送迎バスの用意は年に20校のみ。小学校が中心です。その他に1,2校の中学校が自主的にやってきてくれますが、なかなか会うことは叶いません。おまけに中学生は、部活、塾、受験と本当に忙しそう。10代前半の多感な時期だからこそ、様々な表現を体感できる美術館に来てもらいたい。そんな私達の希望を、美術館が取り上げてくださり、今年の夏の展覧会「イギリスの美しい本」展のときに、「中学生のためのギャラリークルーズ」を企画させていただきました。手作りの冊子や缶バッジ(ちびーちゃんというキャラクターも生まれました)もおみやげに(手前味噌ですが、とても出来は良かったのです)とみんなで作りました。準備期間が短かったのと、PR不足もあり、来てくれたのはほんの少し。でもへこたれません。続けていこうとみんなで誓ったのです。

そして今年もやってきます。夏の展覧会「都市のフランス 自然のイギリス」。なんと今年は「ふぁみ★くる～ず」「中学生のためのギャラリークルーズ」と2本立てになりました。

「ふぁみ★くる～ず」は家族と一緒に来ることを願い「絵の中の森へ」と題してじっくり風景画を中心にみることで小旅行をしていただきたいと思っています。普段の生活では見ることのできない一面を見つけ合いませんか。

中学生はちょっと大人の気分で「時間旅行～革命から鉄道と万博の時代へ」と称して、グループ(その日、出会った人とも)ごとに一緒にトリップしたいと思っています。今年も素敵な冊子や缶バッジを用意して待っています。夏の休日、気楽に涼みに来るような気分であってませんか。新しい自分に会えるかもしれません。

みんなの千葉市美術館。きっと好きになってくれると信じています。

[美術館ボランティア 森下真弓]

◎「鳥居清長展」関連イベント 江戸の粋一人形浄瑠璃の世界 開催！



去る6月2日(土)、「鳥居清長—江戸のヴィーナス誕生—」の関連イベントとして「江戸の粋—人形浄瑠璃の世界」を開催いたしました。文楽人形遣いの吉田玉女師、そして同じく人形遣いの若手のおふたり、吉田玉佳さんと吉田玉翔さんをお招きし、お話と実演により文楽の魅力をわかり易くご紹介いただきました。

定員の倍近い応募者のなかから選ばれたお客様は文楽体験が初めてという方も多く、人形の構造や仕掛けを披露しながらの実演ではどよめきが起こりました。クライマックスは「伊達娘恋半鹿子」より「火の見櫓の段」のパフォーマンス。ヒロイン八百屋お七の見せ場です。恋人を救うため、火刑になるのを覚悟で櫓に上がって半鐘を打つお七の可憐で哀切な姿、その張り詰めた動きを場内が一体となって見守りました。

これを機に文楽の世界に足を踏み入れてみようと思われたお客様も多かったのではないのでしょうか。美術館という場が新しい領域への橋渡しをできるとしたら、とても幸せなことです。

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

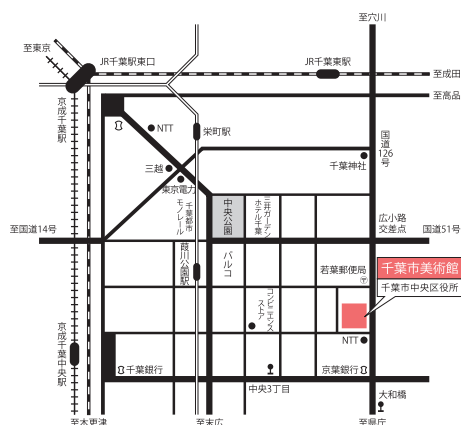
今年度は近世から現代まで、さまざまな時代のアーティストたちについて当館スタッフが毎回わかりやすく解説します。参加は無料です。

【時 間】 14：00より(開場は30分前)

【場 所】 千葉市美術館11階講堂

【定 員】 先着150名(入場無料)

- 第1回 6月23日(土) 「葛飾北斎」
講師：浅野秀剛(本館学芸課長)
- 第2回 7月28日(土) 「橋本閑雪—南画への道程—」
講師：松尾知子(本館学芸員)
- 第3回 8月25日(土) 「伊藤若冲」
講師：伊藤紫織(本館学芸員)
- 第4回 9月29日(土) 「酒井抱一—200年前の展覧会—」
講師：松尾知子(本館学芸員)
- 第5回 10月27日(土) 「八木正—彫刻とは何か—」
講師：藁科英也(本館学芸係長)



【交通案内】

- ◎JR千葉駅東口より徒歩約15分
- ◎千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- ◎バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります

【編集・発行】

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
<http://www.ccma-net.jp>
【発行日】 2007年6月22日
【印刷】 半七写真印刷工業株式会社

 **千葉市美術館**
Chiba City Museum of Art